特集1

商工会議所創立140年記念 時代を超えて今こそ学びたい 渋沢栄一の経営哲学

平成30（2018）年は、明治11（1878）年に東京、大阪、神戸に商工会議所（当時は商法会議所）が誕生して140年を迎える記念すべき年である。そこで、東京商法会議所の初代会頭であり、近代日本社会の礎となる事業に参画し、現在まで続く数多くの企業の設立に携わった渋沢栄一の軌跡と彼が目指した経営哲学に迫りたい。

渋沢栄一が目指した企業像と経営者像

渋沢栄一記念財団
渋沢史料館・館長

井上 潤

明治大学文学部史学地理学科日本史学専攻卒業。1982年の渋沢史料館開館当初から学芸員として勤め、館長に就任以降、現在も地元とのつながりを大切にしつつ世界にも目を向けて同史料館の情報発信力を強化する一方で、関係諸機関とのネットワークづくりに努めている。主な著書に『渋沢栄一―近代日本社会の創造者』（山川出版社）、『渋沢栄一に学ぶ「論語と算盤」の経営』（共著、同友館）ほか

渋沢栄一は『論語』の教えを基に、企業は道徳に則った経営で利益を追求すべしという考え方を基本にしていた。その渋沢が「道徳経済合一説」で説く企業と経営者のあるべき姿は、時代を超えても色あせることはない。そんな渋沢栄一の生き方と考え方の神髄について、渋沢の生涯と実績に関する資料を収蔵・展示している渋沢史料館の井上潤館長にお話を伺った。

民間の商人の力を底上げし新しい世の中をつくっていく

――江戸時代は幕臣だった渋沢栄一が、明治維新後に描いた日本の姿というのはどのようなものだったのでしょうか。

井上 仕えていた一橋慶喜が将軍となったことで渋沢は幕臣となり、慶応3（1867）年のパリ万国博覧会への使節団の一員としてヨーロッパに派遣されました。ナポレオン3世による第二帝政期であった当時のフランスは、産業振興政策が進行しており、銀行が次々と設立され、流通機能が整えられていく時代でした。渋沢がそのフランスの発展ぶりを目の当たりにし、また、ヨーロッパ諸国を巡歴してさまざまな国の姿を見ていく中で、世の中の繁栄や国力の増強というのは、軍事や政治ではなく、産業の振興にあるということを実感しました。また、当時の日本は士農工商の身分制度の中で武士（官）がトップで、民間の中でも商人は最下位でさげすまれていたのに対し、ヨーロッパでは政治家と経済人が対等の立場で国のことを考えていました。そこで渋沢は官尊民卑を打破し、官と民が一体となって新しい世の中をつくっていかなければいけない、そのためには民間の力を底上げする必要があると強く感じました。それが、渋沢の目指す新たな日本の姿というものでした。

――帰国してからの渋沢は、日本